

豊臣期大坂図屏風の謎と魅力

フランツィスカ・エームケ*

私の専門は文化史です。特に絵画に描かれた文化史的内容を研究の対象にしています。「豊臣期大坂図屏風の謎と魅力」と題名しましたが、その謎と魅力を文化史的な観点からより理解しやすくするため、色んなテーマに分けて、詳解します。

豊臣期大坂図屏風を所有しているオーストリアのグラーツ市のエッゲンベルク城は、2010年、世界文化遺産に登録されました。グラーツ市の旧市街も世界文化遺産になっています。

日本とオランダ交流史の専門である Isabel Tanaka-Van Daalen 女史の研究によりますと、寛永18年(1641)に、都市やお城、武器を持った人物を描いた屏風や絵画の外国持ち出しの禁止令が長崎奉行の名で出されています。このことから1641年以前に、豊臣期大坂図屏風は日本を離れた可能性が強くなります¹。

またエッゲンベルク城の館長である西洋美術史専門の Barbara Kaiser 女史の研究によれば、屏風は1660年から1680年の間にオランダ人から購入され、最初ヨハン・ザイフリート・フォン・エッゲンベルク侯の市中の宮殿で使用されていたようです。1754年に始まったエッゲンベルク城内の迎賓階の改修時に、この八曲が解体され、当時流行した「インディアン・キャビネット(小間)」に、異国(中国)情緒の壁画と交互に組み合わせ、壁の装飾として個別にはめ込まれました。世界大戦には、他の持ち運べる調度品は、殆どが持ち去られてしまいましたが、この貴重な豊臣期

大坂図屏風は壁に描かれた絵画と見なされ、今日まで失われずに保存されることとなったのです²。

屏風絵は絵画と比較しますと、大画面ですので、依頼者または絵師の意図や、文化史的または絵画史的情報が、構成要素として複雑に重なり合っています。ですから現代の人にとっては、ただ見ただけでは理解しにくいところもあり、暗示されていることや、重要な意味を見逃してしまうことになってしまいます。この様にいたところに描き込まれた文化的シンボルを探し、歴史的文化史的背景を考慮しながら絵画内容の再構成をしていくことになります。

大坂図屏風絵の作画構成

それではまず大坂図屏風絵の構図がどの様に構成されているのか見ていきます。

普通、標準の屏風は高さ約160cm、六曲一双、つまり二つの六曲の屏風が一組になっております。エッゲンベルク城の大坂図屏風は八曲一隻で、高さ182cm、幅は約480cmと特別に大きく、大画面に五百人弱の人々が描かれています。(図1)

もし大坂図屏風の八曲も一双で、もう一方が存在するとなれば、専門家の間では、秀吉は京の町の大改造を行っていますので、京図と一組になっているのではないかと考えられています。

この大坂図屏風は大和絵派の町絵師によって作画されています。屏風全体に豪華な印象を与えている金泥の源氏雲以外は、人も建物もある程度、簡略化した形で描いています。この特殊な源氏

*ケルン大学教授

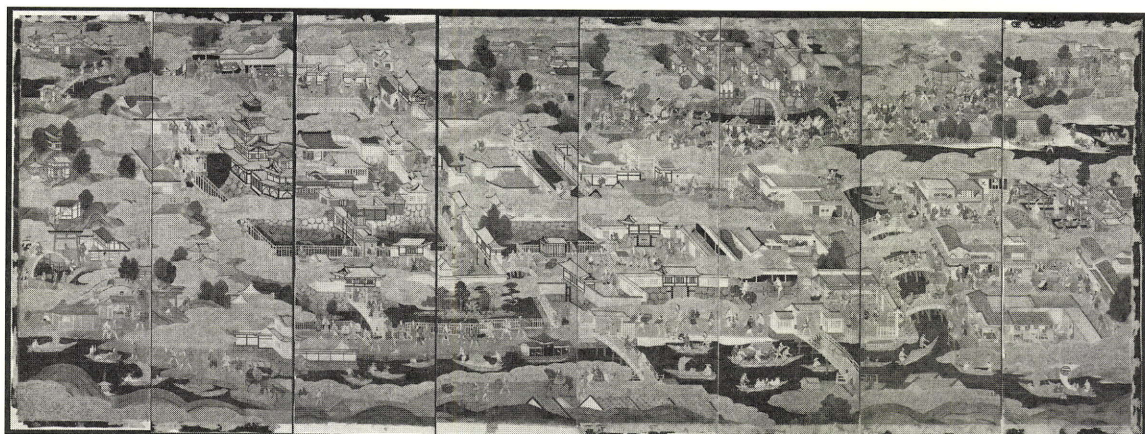


図1 大坂図屏風

雲は胡粉で盛り上げた芙蓉、桜、梅の花模様で飾り、三重の点粒線で縁を取り、その上に金泥を塗り、特に晴れの雰囲気強調しています。(図2) 源氏雲は土佐派が考案したもので、装飾的効果を高めるためと、画面を区切ったり、省略したり、時の異なる出来事を並存して描写する場合、それに遠距離の事物を近くに引き寄せて描く作画手法として利用されます。



図2 源氏雲

存在する少数の他の大坂図屏風が、西の船場から東の大坂城を眺める景観を描いているのに対し、このエッゲンベルク城の大坂図屏風は、珍しく淀川の北から南の大坂城と船場を俯瞰した構図になっています。この意味は、西口が大手門であったのですが、中国使節を迎えるにあたり、慶長元年(1596)北側の二の丸と本丸を結ぶ極楽橋が、

二階造りの壮麗な橋に作り替えられ、北の京橋口が大手門となったからなのです。作画構図としては南北の線を、左上から右下への斜線で統一し、逆遠近法を用いています。

前景の左から右へ淀川、大和川、また淀川と殆ど直線に描かれ、大和川に京橋、淀川に天満橋が架けられています。かつては天下橋とも呼ばれた京橋からは、京街道が大和川を渡って東へ伸び、京橋を渡ると北側しか人家のなかった片原町、その先に進むと鯉江川に渡されている野田橋が見えます。豊臣秀吉(1536-1598)は伏見城下町の建設の一環として、文禄3年(1594)に淀と伏見間に淀川堤(文禄堤)を築き、その上に街道を通し、五条口、伏見、淀、橋本、大坂を継ぐ京街道として新設整備しました。

河川には慶長時代の経済的発展を物語るように、米俵を積んだ運搬船が多く描かれ、京橋と天満橋間の南岸には、京、伏見と大坂の間を往来した川船の船着き場が見られます。航行する色々な船の内特に二艘の大名船が際立っています。一艘は、秀吉の川御座船です。五七桐紋のある赤幕を張り回し、天満橋上流を多数の漕ぎ手で走航しています。(図3) もう一つは、鳳凰丸という名を持つ秀吉の舟あそび用の川船です。京橋上流に碇泊し、方形造の檣皮葺屋根に黄金の鳳凰を戴き、黒地の側壁に白鷺、白地の内壁に柳の墨画が描か



図3 秀吉の川御座船



図4 鳳凰丸

れています。文献から秀吉が鳳凰丸を所持していたことは知られていました³。ここで絵画化された唯一の優雅な鳳凰丸を初めて見る事が出来ます。(図4)

第2扇から第8扇にかけて大坂城郭と総構が広がっています。この壮大な大坂城は、天正11年(1583)から慶長4年(1599)まで、四回にわたる工期を経て完成しています。本丸には御殿、それに五層の天守と三層の小天守が連立天守のように建っています。この天守は、五層目に勾欄付き回縁を持ち、一層には禅宗建築様式である火頭窓が使用されています。(図5)これは織田、豊臣期の天守建築の特徴であります。

西の二の丸には西の丸御殿が見え、側室が住んでいました。総構の内には、お城を囲む様に大名屋敷が点在しています。二の丸への北の入り口として青屋口、京橋口(京口)、南には多分、総構



図5 大坂城の天守



図6 門番

の四天王寺口と玉造口(黒門口)の四つの城門が描かれ、四天王寺口門内には、一人の門番が小屋に座っています。(図6)

特に城郭に関して強調したい二つの建造物があります。一つは、本丸の北側と二の丸を結ぶ極楽橋です⁴。楼門形式の二階建てで、二階には勾欄付き回縁を持っています。破風は金箔で、壁面は花模様で装飾され壮麗な姿を見せています。(図7)この慶長元年(1596)に創建され、慶長5年(1600)に秀吉を奉った京の豊国社に移築されるまでの、二階建ての壮麗な極楽橋の描写は、他に二点しかありません。もう一つの建造物は、絵画として初見の篠の丸といわれる馬出曲輪です。

西の上町に張り出しています。慶長3年(1598)から翌年にかけて三の丸が普請された時に、京橋口前にあった馬出曲輪が増築され、三つの櫓門を備えた堅固で巨大な馬出曲輪になりました。(図8)



図7 極楽橋

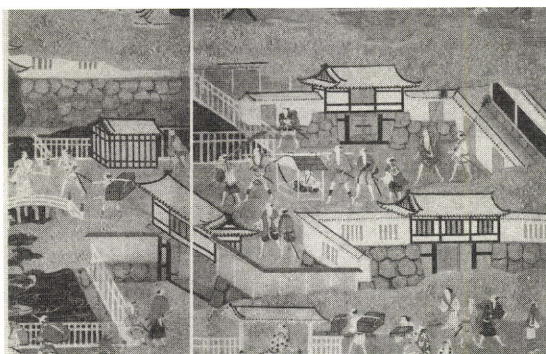


図8 篠の丸

城の総構は、文禄3年(1594)から同5年(1596)にかけて築造されました。第2扇には西の総構堀として初め新堀と呼ばれ、後に東横堀川といわれた堀が天満橋下流の淀川から南に伸び、四つの橋が描かれています。淀川から一つ目の橋は高麗橋です。鯿がのる木戸門を上町側に構えています。江戸で言えば日本橋のごとく、街道の起点でもありました。当時、とても人通りの多い橋でした。橋の上には小さな小屋が建てられ、その中には、銭買いが棹秤を使って旅人に金貨や銀貨を銭に両替えています。(図9) それに高麗橋からは島町通りを通して、天守が見通し出来る様に、また京街道から大坂へ入る前にも正面に天

守が見える様、ヴィスタの景観演出が豊臣時代の城下町造りになされていました⁵。



図9 銭買い

東横堀川の西、第1扇と第2扇の船場は、三の丸が普請された時、そこに住んでいた庶民の移転先として開発され、発展した船場の町屋の賑わいが描かれています⁶。高麗橋の西、船場の鞆町と天満町には秀吉時代の魚市場がありました⁷。屏風には第1扇の下の方(図10)と第2扇の淀川から二つめの堀橋の西橋詰めに鯿を買って帰宅する人が見えます。これにより魚市場の存在が暗示されています。



図10 魚屋

船場の町に接して第1扇に立派な神社が描か

れていますが、これは上難波の仁徳天皇宮だと私は推定しています。(図11) この神社は明治8年、難波神社と改称されています。その詳細につきましては、後に仁徳天皇宮のテーマの中で説明します。

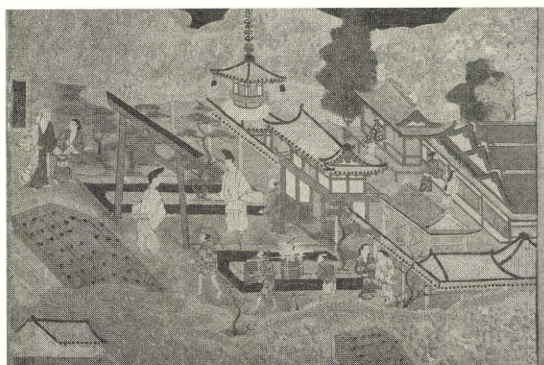


図11 上難波の仁徳天皇宮

第1扇の上部は堺の町で、赤地に花模様のある小袖を着た女が滑車を使って井戸の水を汲んでいます。これは開口神社の西門前あたりにあった金龍井といわれた堺の名井のように思われます⁸。(図12)



図12 堺の環濠と開口神社の西門

更に第3扇と第4扇の上部つまり大坂の南に描かれた神社は四つの本殿、反橋、石舞台により住吉大社と確認出来ます。(図13) 大社前の祭行列は旧暦の六月三十日に堺の宿院への三里の道を神幸する荒和大祓の祭礼です。行列の先頭には、住吉大社に属する神宮寺の社僧が簡素な絹衣を着て、茶磨笠をかぶり、騎馬にて先達を務め、堺の

環濠を渡ろうとしています⁹。(図12) また住吉大社の平橋前の行列には花笠を戴く白馬上の稚児が見えます。(図14) これは荒和祓家と言われ、重要な神事役で、堺まで神輿のお供をします。荒和祓家は平野郷の七つの名家から選出されます¹⁰。



図13 住吉大社



図14 荒和祓家

住吉大社の左、第4扇と第5扇に描かれた寺院は、有名な石の鳥居の存在により四天王寺と確認されます。(図15) この西門前の石の鳥居は忍性上人(1217-1303)により鎌倉時代後期の永仁2年(1294)に創建されました。当時はこの門から海へ沈む太陽を拝むことが出来、西にある極楽浄土へ至る東門であると言われ、それ以後、西門

一帯は浄土信仰の場として発展いたしました¹¹。



図 15 四天王寺

四天王寺、住吉大社、堺町は大坂城より遠く離れた南に位置していますので、絵師は構図上の南である上部に描き、大坂城四天王寺口からの堺街道で接続し、構図上の破綻を避けています。この四天王寺と住吉大社が右上に構図されるのは、大坂城図屏風と京・大坂図屏風と相似していますので、当時、すでにパタン化していたことが分かります。

第8扇に描かれた寺社は、最初、私は大坂城の東に存在する近くの寺社だと思い、探しました。(図16)しかし大坂城のすぐ東は湿地地帯で、その向こうの山辺にも、それに該当する寺社は見つけることが出来ず、苦心しました。第8扇の上部の簡略化して描かれた一風変わった建物が、何であるのか考えている内に、それが宇治の平等院鳳凰堂だと気づき、この第8扇は、隣国の、山城国の寺社が描かれているのだと解り、納得しました。

第8扇上部には、宇治の平等院鳳凰堂と宇治橋、その橋の手前の建物は橋寺、それに宇治川の絵にはパタンとして欠かせない柴舟です。(図17)柴は船で伏見、京方面に供給されました。その下は笠取山(371m)の山上の上醍醐寺と、麓の下醍醐寺ではないかと思います。下醍醐寺の象徴でもある五重塔が描かれていないのが不思議ですが、寺の中央に豊臣家が建立した仁王門が見え、多宝塔により密教寺院であることを示しています。山

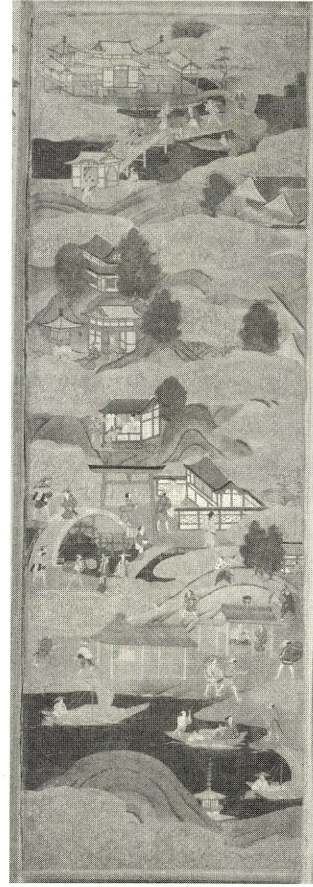


図 16 第8扇

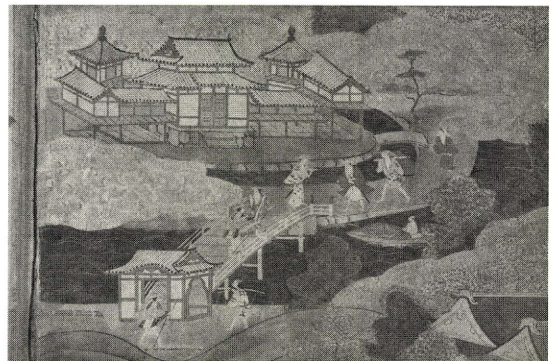


図 17 平等院鳳凰堂と宇治橋

の上の建物の屋根が檜皮葺で描かれています。当時、建立された上醍醐寺の仏殿はすべて現在においても檜皮葺です。同様に男山(143m)の山上と麓に社殿を持ち、放生川に反橋が架かる岩清水八



図18 醍醐寺と岩清水八幡宮

幡宮が描かれています。(図18)

その山下は橋本で京街道から石清水八幡宮へ参詣の人はこの所より山へ上がり、繁華だったらしく茶屋が描かれています。(図25) 秀吉は朝鮮侵略の準備として文禄元年(1592)京と山崎間の西国街道を整備し、橋本と山崎間の淀川にとっても大きな橋を架橋させました¹²。しかしまもなく洪水で壊れたと言われている¹³。この橋が存在した期間の京と大坂間は東寺、山崎、橋本、大坂という陸路がとられました¹⁴。

橋本の対岸に丸い緑線を見せる山は天王山(270m)です。麓の多宝塔は安土桃山時代の三重塔を持つ山崎の真言宗の宝積寺、通称宝寺であるように思えます。(図19) 17世紀の宝積寺絵図を見ますと多宝塔は宝積寺ではなく、山崎の離宮八幡宮に存在していました¹⁵。したがって荏胡麻油の油座の本所として名の知られていた離宮八幡宮の可能性もあります。

このように第8扇では、絵師は山城国の名所を強引に大坂城の直ぐ隣に構図したため、その間により以上の金泥の源氏雲を配する必要性が生じ、また第8扇の孤立を防ぐため京街道で大坂と接続した苦心の跡が見えます。

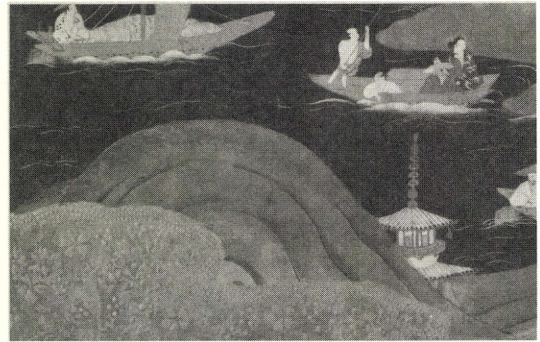


図19 天王山

仁徳天皇宮

第1扇の門前に庭園があり、楼門、絵馬堂、多宝塔、拝殿、それに立派な玉垣内に三つの本殿を持つ神社は、上難波の仁徳天皇宮が社格が高く、船場に存在したことからも、一番該当しているのではないかと思います。仁徳天皇宮は仁徳天皇、素盞鳴尊、倉稲魂命の三神を祀っています。

同社の由緒記には、御祭神の仁徳天皇は406年に河内国丹比の地に鎮座され、天慶6年(943)摂津国平野郷に遷座、難波大宮または平野神社と称して摂津国総社でした。天正11年(1583)に開始された大坂城築城の際、現在地への遷座は、平野郷の商人の大坂への移転や、西の海側から攻撃された場合の防戦目的と関連しているように思われます。しかし難波神社の社宝として遺されている寄進、寄附状を調べてみますと、中世から將軍や武将の戦勝祈願や勝利の御礼等で、軍神として鎮護の役割を担っていました¹⁶。秀吉はそのような戦略的、宗教的目的のため、城の近くに遷座させたのではないかと思います。

寛政8年(1844)出版の摂津名所図絵の挿絵や、明治期の波華百事談(明治27・28年頃)の説明によれば、江戸末期の上難波仁徳天皇宮は、四方に鳥居が建ち、玉垣を備え、浪花中で唯一の楼門造りの拝殿を持ち、その扉には、朝廷の御門以外には無いと言われる、麻の葉の形をした彫物が

されていました¹⁷。このように、大坂の神社の内でも、特別に立派な社殿を江戸末期まで維持していたことがうかがわれます。こういった事実から私は上難波の仁徳天皇宮だと推定いたしました。

豊臣家と寺社

何故これらの寺社が選択され描かれたのでしょうか。結論から言えばこれらの寺社と豊臣家とは深い係わりを持っていたからなのです。

仁徳天皇宮は天正期の大坂城築城の際に城下町建設の一環として摂津国の平野郷から社領のあった上難波に遷座させられました。現在の難波神社には秀吉の二状の寄附状が社宝として所蔵されています。それには仁徳天皇大宮と呼称されています。当時は難波皇太神宮の名称もありました¹⁸。

住吉大社は信長の石山本願寺合戦により、天正4年(1576)に本殿を含め、多くの建物が焼失しました。秀吉は文禄3年(1594)に住吉大社の社領を定め、信用していた木食応其(1536-1608)に命じ、同4年(1595)までに三棟の本殿が再建されています。慶長11年(1606)には豊臣秀頼(1593-1615)により大々的に造営がなされ翌年完成しています¹⁹。当時の建造物として反橋の石の脚、石舞台、南門、東西の楽所が現在もなお存在します。

四天王寺は同じく石山本願寺合戦により天正4年(1576)に焼失しました²⁰。秀吉は四天王寺造営目録を作成し援助と勧進活動を行い、彼の亡くなった二年後の慶長5年(1600)に彼の意志を継いだ豊臣家により再興されました²¹。

平等院に関係するところでは、秀吉は浄土宗の僧、玄誉に修理を命じています。木食応其も修理に関与していました²²。秀吉が寄贈したと言われる二基の石灯籠が存在します。

宇治橋との関連では、秀吉が橋守通円に命じて毎朝、茶の湯のために宇治橋の三之間で宇治川の水を汲ませ、伏見城まで届けさせたとの伝えが

残っています。この通円の子孫は、宇治橋のたもとで現在も茶屋を経営しており、秀吉から贈られた千利休の作といわれる立派な釣瓶が遺されています²³。宇治橋の水は京の三名水として知られていました²⁴。

醍醐寺と秀吉の繋がりは、慶長3年(1598)3月15日に千三百人以上の女房衆が参加して催された醍醐の花見で有名です。室町時代中期の文明2年(1470)に下醍醐寺は戦禍を受け、五重塔以外は焼失していました。慶長2年(1597)に秀吉は五重塔を修理させ、下醍醐寺の復興を決定しています。

醍醐の花見のために各地から七百本の桜木が移植され、現在、国宝の三宝院とその有名な庭園が築造されました。花見の五ヶ月後の8月18日に秀吉は亡くなるのですが、彼の意思は、秀頼に受け継がれ、長年に渡り、下醍醐寺が復興されました。また後の慶長11年(1606)に秀頼は前年焼失した上醍醐寺の如意輪堂、五大堂、御影堂の再建を命じ、同13年(1608)に完成しています²⁵。

岩清水八幡宮と豊臣家との関係では、秀吉は天正年間後半から保護し、寄進をなんども行い、秀吉と秀頼によって旧社殿をことごとく取除き新造し、長年に渡り係っています²⁶。

山崎の宝積寺に関しましては、天正10年(1580)の山崎合戦で、秀吉が明智光秀(1528?-1580)を破った後、天王山に山崎城が築城されました。この時、城域に取り込まれた宝積寺は秀吉の宿泊所となりました。また三重の塔は秀吉が山崎合戦の勝利を記念して一夜にして建立したと伝えられています。現在の本堂は慶長10年(1605)頃、秀頼により造営されたと言われています²⁷。

秀吉と松

日本の代表的な常緑樹である松は、常に日本風景画に描かれます。特に住吉の松は、万葉集にも詠まれ、古今集からは歌枕としても詠まれています

す。住吉名勝図絵には、当社が松を神木とする理由を述べています。それには昔、崇神天皇の夢に、大空より、こうこうとした光が住吉の浜に下りました。天皇はそれに驚きて、人をやって見ますと、浜に三本の松が生ひ出ておりました。これが相生の松である、と述べています²⁸。この逸話から住吉大社または住吉の浜が描かれた絵画、屏風には、古くから必ず松が描かれています。それほどパタン化されているにも拘らず、エッゲンベルク城の大坂図屏風の住吉の浜には松が描かれていません。(図20)

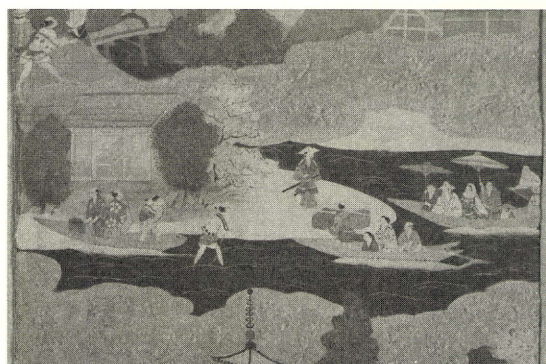


図20 住吉の浜

何故でしょうか？その謎を解くために、この屏風の何処に松が描かれているか眺めてみますと、この大きな画面には、ただの七本の松しか描かれていません。上難波の仁徳天皇宮の前庭に四本(図11)、平等院鳳凰堂の池の橋際に一本(図17)、それに大坂城の青屋口と京橋口の間の二の丸の堀に、当時、実際に存在したサギシマに他の木々と一緒に二本の松を描いています。(図21)

松は神の依代でもあり、長寿、慶福のシンボルでもあります。このような松を秀吉は、とても好んだようで、歌には号として一字名の松を使用しています。秀吉の長男の名は鶴松、伏見城には松の丸曲輪、天正16年(1588)4月14日から五日間、後陽成天皇(1571-1617)が聚落第へ行幸されました際、16日に催されました和歌会の詠題は「寄松祝」でした²⁹。秀吉の一字名に因ん



図21 サギシマ

で飛鳥井雅春(1520-1594)が選題しました。醍醐寺には、醍醐の花見で詠まれた、醍醐花見短簞が131葉、社宝として遺っており、その内で27の歌は相生の松を、13の歌は松を詠み入れています³⁰。

仁徳天皇宮、平等院、大坂城の松は明らかに何かを暗示しているのです。仁徳天皇(5世紀前半頃)は難波に高津宮を造営し、大坂の歴史の始まりと深く関係しております。仁徳天皇には、有名な「三年無役」の逸話があります。それには天皇が高津宮の高台から遠望したおり、民家から煙が上がらないのを見られ、その原因が民の貧しさであることに気づかれました。その貧しい民のため三年間、課役を止めさせましたとあります。聡明、叡智の天皇として知られています³¹。

藤原頼通(992-1074)は52年間にわたって摂関の地位にあり、当時の最高権力者であったのです。阿弥陀の極楽への往生を願って永承7年(1052)に阿弥陀堂つまり鳳凰堂を建立しました。(図17)

仁徳天皇、藤原頼通、秀吉の三者は時代は異なりますが共通するところがあります。最高権力者として君臨し、仁徳天皇は日本最大の前方後円墳を後世に遺し、頼通は一番優雅な鳳凰堂を、秀吉は天下人として天下一の華美で巨大な日本一の城郭を建造しました。秀吉は過去の二者と同等の覇者であり構想家でもある自負があったのでしょうか。

大坂図屏風の宗教性

大坂城と城下町を寺社が取り囲む構図を選んだ理由には二つあるように思います。一つは織田信長（1534-1582）に始まり、秀吉により完結した天下統一により、寺社勢力を武家支配者に初めて完全に従属させた史実を意味し、寺社に大坂城の守護神としての新しい役割を付与し、覇者として、また天下人としての権力を誇示しているのです。二つ目はこの構図により大坂城曼荼羅を意図しているのです。この点について詳しく説明いたします。

大坂夏の陣図屏風に描かれた大坂城天守の五層に、黒地の外壁に白鷺が描かれていますことは良く知られています。しかしその意味が今まで誰にも理解出来ませんでした。エッゲンベルク城の大坂図屏風にも二ヶ所に白鷺を見ることが出来ます。先に松に関して述べました二の丸堀のサギシマの左端に一羽の白鷺がおります。（図21）それに同じ第5扇の右下、秀吉の鳳凰丸の右外壁に見える五羽の白鷺の絵です。（図4）

摂津名所図絵の住吉大社の項で「白鷺は社記の云う、当社の神使とす」とあります³²。さらに神功皇后が新羅征討後に渡海の導きの神であった住吉大神の御鎮座地を求められたおり、この地の杉の木に鷺が三羽来て止まったという奇瑞により、大神の御心に叶う所として社地に定められたと伝えられています³³。大社蔵の細川勝元（1430-1473）筆の住吉大神宮神号の掛軸には、赤の鳥居の背景に松の枝に三羽の白鷺が描かれ、また狩野元信（1476-1559）筆の住吉大神神影軸には、白髭の老翁の姿をした住吉大神の背景に松の樹に三羽の白鷺が描かれています³⁴。現在、本殿の金の扉に松と白鷺の絵が描かれ、大社の巫女は松に白鷺のかざしを挿して舞っています。住吉大社を秀吉が篤く崇敬していたことは知られていましたが、松と白鷺により秀吉と住吉大社との深い係わりが見えてきます。また秀吉の朝鮮遠征の意図からしても、神功皇后を崇敬していたのでしょう。

さらに石町付近にあった渡辺の地主神としての座摩神社は大坂城築城の際、現在の地、船場に移転されました。古来より神社の御神紋は白鷺であり、その由来は神功皇后が座摩神の御教により白鷺の多く集まる場所に座摩神を奉斎なされたとあります³⁵。

それから有名な雑喉場の魚市場が江戸時代の延宝年間（1673-1681）にできるまで、そこは鷺島とよばれていました³⁶。このように昔の大坂一帯は白鷺の生息に非常に適し、庶民に神聖なる鳥として崇められていたように思われます。

さて、再度屏風に目を移しますと、第5扇の下の方鳳凰丸から左斜め上に向かって、サギシマ、極楽橋、天守が直線上に意図的に構図されています。（図22）鳳凰丸はこの世の人生の謳歌と太平の世を意味し、サギシマに松と白鷺は、神に守護された神聖なる城域であることを表し、極楽橋は名のとうり、此岸と彼岸の架け橋になります。絢爛豪華な御殿や豪華な遊興施設でもあり、茶屋もある山里丸曲輪を持つ本丸は、極楽浄土を意味し、五層の天守は仏教の世界の中心にそびえ立つ須弥山を暗示しているように見えます。このように大坂図屏風は二元的観点を有しています。



図22 鳳凰丸、サギシマ、極楽橋、天守

城曼荼羅ともいえる構図を選択した理由は、多分、制作された時点で既に秀吉は亡くなっていたのです。没年の翌年、慶長4年（1599）に秀吉は

豊国大明神という神号の宣下を受けています。同18年(1613)には豊国大明神の分霊が秀頼により大坂城に勧請され、山里丸曲輪に社殿が造営されました³⁷。このように神になった秀吉を祀り、生前の偉業を讃えるために、曼荼羅的作図になったことと思われます。

武家社会

この屏風は、武家社会が重点的に描かれています。この中で重要と思うところを説明いたします。屏風の中心である第4扇から第5扇の中央に駕籠に乗った上級武士が篠の丸に到着し、それを出迎える為に、京橋口前には、一人の武士が肩衣袴の正装で立っています。その状況に対応して極楽橋の前に、二人の武士が上級武士を饗応する為の準備として、お盆に、一人は鮑を、もう一人は昆布を運んでいます。(図7) 鮑と栗と昆布の取り合わせで、祝い事や出陣の前に行う儀式である「三献の儀」が思い出されます³⁸。それでは栗が欠けているのではないかとと思われるのですが、絵師はやはり第3扇下の八百屋の店前に大根などと一緒に栗を描きいれています。(図23) 三献の膳の三宝には打ち鮑、勝ち栗、昆布が、それぞれ五切れ載せられています。打ち鮑とは、干した鮑の身を打ち伸ばしたもの、勝ち栗は、栗を殻のまま乾燥させ白でついて殻と渋皮をむいたもので、「つく」ことを「かつ」とも言うため勝ち栗と呼ばれていた。この三つを順番に食べては三三の杯の酒を飲む儀式なのです。これは、打ち鮑は敵を討つ、勝ち栗は勝つ、昆布はよろこぶと言う縁起担ぎなのです。三三の杯を三回飲みますので現在の結婚式で行われている三三九度の杯となりました。

ことわざに、「桃、栗三年、柿八年。梅はすいとて十三年」があります。これは、日本の代表的な果物を取り上げ、それぞれの木の実のなる年数を言っています。この屏風にもこの果物が描かれ



図23 八百屋

ています。第2扇の下、何かを食べている裸の子供の前に、器に入れた柿が見られます。そこから高麗橋を渡った側の店前には、器に入れた柿と桃、もう一つの器に栗が載せられています。その続きの八百屋の縁台には、大根、蕪などと一緒に栗が置かれています。梅の実はどこでは描かれていませんが、源氏雲や長持に梅の花が見えていますし、着物の模様としていたる所に梅の紋が描かれています。

第3扇の下の大名屋敷の前で二人の武士が馬の調教をしています。一人は裸で赤の六尺ふんどしをしています。赤色は魔除けとしての意味を持ち、当時は赤い色のお守り袋を腰に下げる風習もありました。(図24)



図24 赤い色のお守り袋を腰に下げる漕ぎ手

第8扇の橋本の近くに二人の鷹匠に勢子や犬引きが描かれています。(図25) その右横の鳥居の傍には、細い竹竿の先に鳥もちを塗って、鷹の餌の為に鳥を捕獲している鳥刺しがいます。文禄元年(1592)には22人の秀吉の鷹匠の名前が知られており、鷹匠の下で働いていた部下を含めると850人ほどの人たちが秀吉に従事していた様です³⁹。また慶長2年(1597)には4人の鷹匠が本丸の奥御殿まで入ることが許されており、それほど鷹匠は優遇されていました⁴⁰。それを証明するかの様に、第5扇中央の二の丸に2人の鷹匠が描かれています。鷹狩りは天皇や貴族と大名だけに許された特権でした。

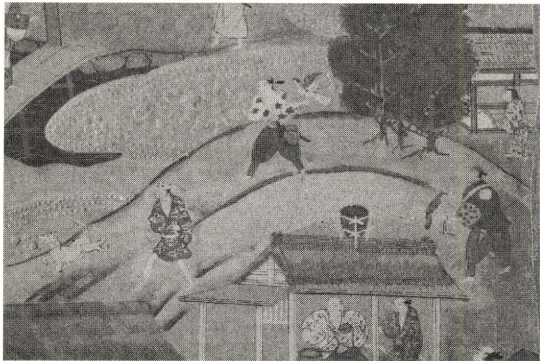


図25 鷹匠と犬引き

武家の出仕に付き物の鉄箱はさみばこは、いたるところにみられます。これは着替えの着物を入れて運ぶ道具で信長の時より始まり、大名行列などで、対の鉄箱にて行進するのは、秀吉の時から始まりました。

庶民社会

第1扇の下では男性が行水しています。女性が着替えを持ってくる場面が描かれています。第2扇の下、東横堀川に突き出た縁台から女性が釣瓶で川の水を汲み上げています。その横では、頭に水桶を載せた女性が見えます。この東横堀川から西の船場は底湿地を開発したところで、海に近

く、井戸の水は塩気があり、美味しい水ではありませんでした。しかし大坂は河川の多い水量の豊かな土地ですので、庶民は河川から飲料水をまかになっていました。それに対して堺の町は名水の取れる井戸がいくつかありましたので、堺には井戸が描かれています。

第3-4扇の下京橋と天満橋の間の船着き場は、江戸時代に入りますと八軒家と呼ばれ、旅籠などが建ち並び、旅人でとても賑わった所です。慶長時代も賑わっていたらしく、赤い色の前掛けをした宿屋の留め女が旅人に話しかけています。赤い色の前掛けは当時、京、大坂で下女がつけていました。(図26)

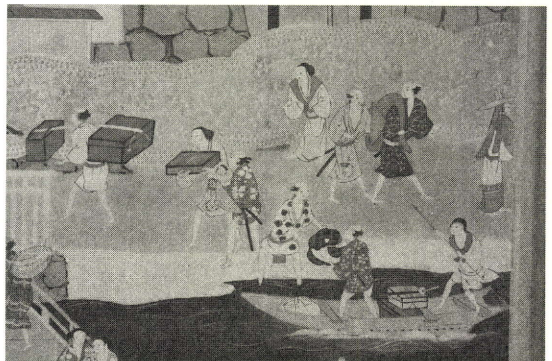


図26 船着き場

庶民の子供の遊びとしては、第2扇中央の船場で子供達が棒を振り回し、合戦遊びを行っています。(図32) これは現在も住吉大社の祭日に、子供達が鎧の複製をつけて行う棒打ち合戦として残っています⁴¹。その子供達の左の橋上と橋詰めに春駒で二人の男の子が遊んでいます。(図27) 春駒は馬の頭を形に作った物を竹の先に付け、胴は布で表し、子供がまたがってあそぶ玩具です⁴²。

第1扇の船場には、大道芸人の八丁鉦が描かれています。やからがねとも言われ、若者が八つの鉦に紐を付けて、首から下げ、これを首を中心にして、ぐるぐると早く振り回し、両手の撞木で打ち鳴らす芸です。江戸時代の寛永期になりますと、若者は胸の前に赤い鳥居の形をした物を下



図 27 春駒遊び

げる様になります。若者の周りに四人の僧がつばの広い帽子を被り、鉦や太鼓を叩いて音頭を取っています。(図 28) このつばの広い帽子は旅の僧が被った物で、江戸初期の元和期の屏風には見られましたが、寛永期には廃れてしまいます。八丁鉦に付き添った僧の着物も色とりどりで、後には今で言うお坊さんの着物に統一されて描かれますので、この大坂図屏風の八丁鉦の描写は調べたかぎりでは古い形態を描いています。



図 28 八丁鉦

この慶長年間には、経済の発展により庶民の暮らしも多少よくなり、旅をしたり、寺社参りする人たちも増えてきます。第 8 扇の平等院と石清水八幡宮には、参詣する巡礼の人たちが描かれて

います。巡礼の人たちは、菅笠に杖、それに袖無し羽織に似た笈摺を着ています。笈摺はここでは黒、青、緑色で、背中の中央が縦長に、白地になっており、字が描かれています。(図 29)「南無大慈悲観世音菩薩」などと書かれているのだと思いますが、南無の「なん」の字だけが読み取れます。この当時地方では、まだ旅籠制度が未発達状態で、旅人は野宿か、または寝どころを借りるだけで、炊事は自分で行いました。ですから描かれた巡礼達は皆、細い米俵を担いでいます。その内の何人かは皮の火打ち袋を腰に下げ、その中には石英石と三角形の火打ちがねと火口が入っていました。



図 29 巡礼

第 3 扇の中央の下から 4 番目の橋の東橋詰めに、三人の頭巾を被った山伏がみえます。その一人は皮の腰当て、ひっしきとも言われ、それを腰の後ろに下げており、それには入山に必要とされる斧が描かれております。二人目は腰に綱でホラ貝を下げています。この山伏の緑色の袴には、輪宝紋が描かれています。修験道では、輪宝を法輪として尊重していました。やはり絵師はそのことを認識していたのでしょう。後ろの家の反対側にも、もう一人山伏が棒で荷を担いで歩いてます。彼の袴にも輪宝紋が見えます⁴³。秀吉ゆかりの下醍醐寺は修験道の拠点でもありますので、そ

れを暗示しているのかもしれませんが。(図30)

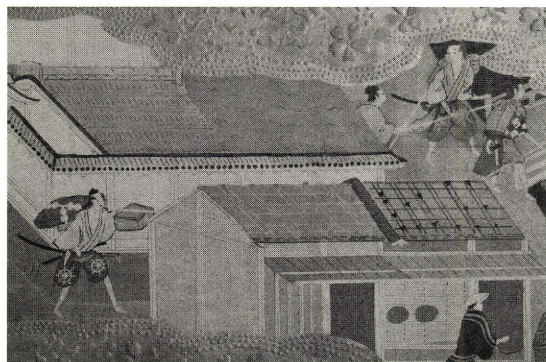


図30 山伏

秀吉時代は、茶の湯の最盛期で、寺社の門前にはすでに茶屋が存在していました。この屏風では、住吉の浜と橋本にいくつかの茶屋が描かれています。橋本は石清水八幡宮の門前でもあり、京街道が通っていましたので、とても繁栄していました。草葺きの茶屋では茶坊主が客にお茶をたてています。

大坂は陸路よりも水運を特に利用しています。ですからこの屏風には牛車が描かれていません。慶長期にはすでに物産の集積地として発展し、そして、それを物語る様に大和川、淀川には米俵を積んだ運搬船が多数見えます。この船のほとんどはまだ蓆の帆で第1扇の下に一隻だけ木綿の帆が使用されています。(図31) 木綿栽培は大坂地方では、16世紀中頃より始まり、急速に広まりました。木綿の帆は強靱で、強風に耐えて速力を

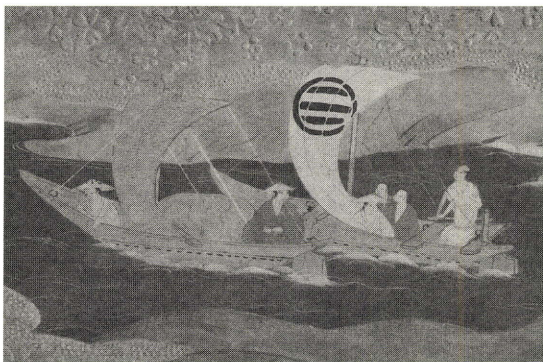


図31 運搬船

増すことができたのです。米俵には鼠が付きものでその鼠対策として第4扇の下の方の米俵の上に、獅子みたいな顔を持つ猫が描かれています。

店の看板

第2扇の中央の店前に、袋の形をした薬屋の看板が下がっています。これは干した薬草を袋に詰めて、店だなに並べる為、薬屋の看板になりました。その横の二階建ての建物は料理屋で、酒屋の看板でもある杉の葉で作られた酒幕さかぼろきが軒の上に取り付けられています。角にも壺の形をした看板に「寸」の一字が書かれています。多分、酢の販売もしているのでしょう。酒や食事が出来る様に、縁側には茶碗等が用意されています。二階には青い畳が敷かれており、ここでも飲食が出来たのでしょう。(図32)



図32 看板

第1扇の八丁鉦やちやうしんの右側の建物にも酒幕さかぼろきが描かれ、その下に狭匙せつかい(切匙)の形をした看板が下がっております。それには「みそや」と書かれています。(図33) 味噌も販売していた様です。この狭匙せつかい(切匙)は、味噌等をすり鉢ですった時に、内側などについたものをかき落とす道具です。これを実際に使用している場面が、第2扇の下の方の角の店に描かれています。女性がすり鉢を使っており、その横の飯櫃なのでしょうか？その上に直ぐ使えるように狭匙せつかい(切匙)が置かれてあります。

その前の縁側には盛り飯されたお椀と、とろろ芋が並べてありますので、ここではとろろ汁をかけたとろろ飯が差し出されたのでしょう。



図 33 味噌屋の看板

その屋根続きの後ろの建物には、うどん屋の白い看板が見られます。この時代はまだ蕎麦屋がありませんでした。蕎麦屋が独立するのは、元禄時代以後で、蕎麦粉のつなぎに小麦粉を加えて、ゆでても、ちぎれにくい蕎麦麺が登場してからです。その以前、くずれないようにセイロで蒸して作っていました。現在、盛りそばがセイロに載せて出されるのは、その頃の名残です。

景観年代

風俗から景観年代を考察してみます。

屏風には十二人の武士が肩衣袴を着ております。肩衣かみしもと言うのは、江戸時代の袴かみしもの前身です。その内七人が前向きですので、その肩衣の、前の布の形で新旧の判断が出来ます。旧式は前の布が肩から同じ幅で下がり、腹部で掛け合わせ、袴に差し入れます。新式は肩の布が三角形になり、前の布が細くなり、掛け合わせます。これは慶長5年(1600)を境にして始まり、慶長年間には新旧の交代は終わっていました。描かれた武士達の肩衣は旧式です。(図34)

駕籠は文禄期(1592-1596)に出現したようですが、記録の上では慶長5年以降になります。



図 34 肩衣袴



図 35 駕籠

描かれた駕籠の形体は輿から駕籠への過渡期のような古風な感じがします。(図35)

煙草の喫煙は慶長10年(1605)頃から流行し始めました。この屏風には喫煙している人がみられません。

女性が着ている小袖は安土桃山時代に流行した腰替り模様が多く見られます。これは小袖を上中下⁴⁴に三等分し、腰の部分の中が上下と異なる色や模様を持った小袖です⁴⁴。(図36)

こういった当時の流行を考慮してみますと、風俗景観年代は慶長前半期に推定出来ると思います。

また建造物から景観年代を考察しますと、極楽

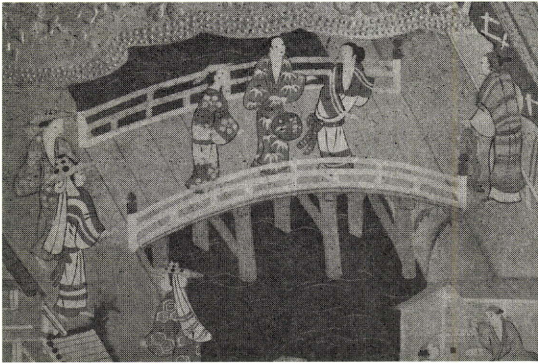


図 36 腰替り模様

橋が架橋されたとされる慶長元年（1596）が上限です。それに描かれた寺社の中で最後に新造営されたのは、上醍醐寺ですので、下限は完成年の同13年（1608）だと確定されます。

依頼者と制作年代

金泥を源氏雲や着物に多量に使用しています。それに特別な屏風の大きさから推定しましても、依頼者は裕福で、豊臣家に恩恵を受けた大名ではないかと思われます。

大坂図屏風を詳しく眺めてみますと、総構内に、塀と門構えの大きな大名屋敷が三カ所見えます。その内の一つで第3扇中央の大名邸だけが人物が描かれています。その大名邸は、立派な石畳の門構えを持ち、下部は石垣、上部は瓦葺きの半黒塀で囲まれ、庭木が見えています。そこでは主人が檜皮葺屋根の主殿の縁側に、一人の武士を従えて座り、扇で顔の下半分を隠しています。ここは石町あたりで加藤清正（1562-1611）の上屋敷があった所です⁴⁵。（図37）

大名は普通、複数の紋を使用しております。加藤清正の紋では、蛇の目と桔梗紋が知られていますが、加藤清正家は藤原北家道長の流と称して、藤原の家紋、下り藤をも使用していたようです⁴⁶。江戸末期の浮世絵には下り藤紋の清正を描いたものがあります。大名邸の縁側の前庭には女性が

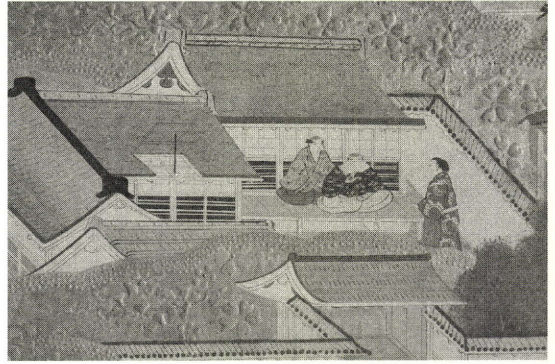


図 37 加藤清正の上屋敷

立っており、主人に話しかけているように見えます。着ている赤の小袖の模様は下り藤です。

二の丸内で供を連れた武士は一人だけ描かれ、今まさに西の丸への門をくぐろうとしています。二人の供の一人は、清正の紋である蛇の目の模様の着物を着て挟箱を担いでいます⁴⁷。

清正は秀吉と同じく尾張の中村に生まれ、清正の母と秀吉の母が親戚である縁により少年の頃から秀吉に引き立てられ、戦功で武名を高め、大名に出世しました。また秀吉亡き後、彼を敬って豊国大明神の分霊を熊本に勧請しています⁴⁸。秀吉との縁者である誇りと、秀吉への恩、また秀吉の天下統一の業績を讃え、加藤家に史実を遺したいとの意図により、屏風を依頼したのではないかと推察する次第です。

清正は豊臣家の存続を願って慶長16年（1611）に京都二条城で家康と秀頼を会見させます。しかしその直後、熊本への帰国途上で発病し、帰城して間もなく亡くなります⁴⁹。もし依頼者が実際に清正であるとしみますと、大坂図屏風の制作年代は彼の晩年、慶長13年（1608）から16年（1611）までに限定することができます。しかし、既にパターン化している大坂図屏風以前に、参考となる初期の屏風が存在したか否かで、制作年代が寛永期まで下がる可能性があります。ですから制作年代につきましては、今後、専門家による検討が必要かと思います。

一情景の考察

最後に大坂図屏風絵の内で注目すべき一つ的情景があります。第5扇の中央に位置する京橋口の門内に、一人の貴婦人が赤地に桜の模様の小袖を着て、金地に花と網代垣模様の被衣かすきを被り、門外を眺め、武士の団を待っています。そして、この女性の右頭上、女中が掲げる長柄傘の内に下がっている、金地に赤の輪郭線と、赤点で描かれた小さな四角形が目にとまります。匂い袋のようですが、しかし確定はまだ出来ません。この女性の位の高さを示しているのでしょうか。その彼女の傍に、若者が金地の小袖の上に、貴婦人と同じ模様である赤地に桜の袖無し羽織を着て、青地に金の横縞の袴で立っています。桜は秀吉が一番好んだ花でした。この様な状況から想像をたくましくしてみますと淀殿（1569-1615）と秀頼のように思われます。（図38）

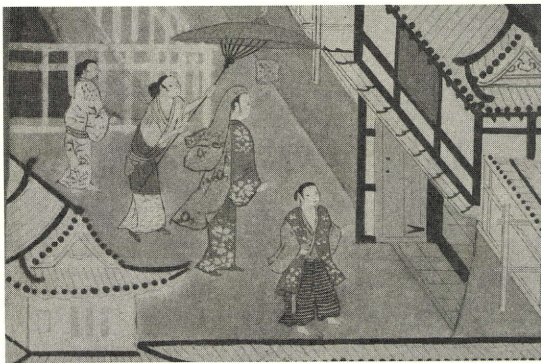


図38 淀殿と秀頼

さらに京橋口門外に目を移しますと、先ほどお話ししました様に、二の丸堀橋の上には肩依袴の武士が立ち、駕籠にて、篠の丸曲輪に到着した上級武士を出迎えようとしています。この上級武士は、三人の供侍に三人の小姓、一人の弓持ち、一人の薙刀持ち、二人の槍持ち、一人の挟箱を担いだ従者を従えています。この武士の団を絵師は特に屏風の中央に位置するように構図しています。もし貴婦人と若者を淀殿と秀頼と仮定します

と、二人が二の丸にまで足を運び、出迎える相手は、当然秀吉でなければならないのです。（図8・35）しかしこの屏風が描かれた時点で、秀頼がこのような若者に成長し、大坂城に居城していたしますと、秀吉は既に没していたはずで、秀頼は秀吉が亡くなった五ヶ月後の慶長4年（1599）1月10日に、秀吉の遺命に従い伏見城を徳川家康（1542-1616）に譲り、淀殿と共に幼児期を過ごした伏見城を離れ、大雨の中を大坂城に移っています⁵⁰。この時まで秀頼は数え年七歳でした。

したがってこの情景は亡くなっている秀吉を髭をはやした壮年の姿で再現し、理想化した親子の情景を表現していると言えます。

以上のように屏風を依頼された絵師は、知的に構図を処理し、史実と宗教性を加味し、天下人秀吉への謳歌と大坂の繁栄を絵画化し、文化的に非常に価値のある一風変わった魅力的な屏風を後世に遺すことになったのです。

最後に秀吉の辞世を紹介します。

“つゆとをち つゆときへにし わがみかな
なにわの事も ゆめの又ゆめ” 松

註

- 1 Tanaka-Van Daalen, Isabel: “Biobes” oder vergoldete Paravents: Der Export japanischer Stellschirme im 17. Jahrhundert. In: Franziska Ehmcke, Barbara Kaiser (ed.): *Ōsaka zu byōbu. Ein Stellschirm mit Ansichten der Burgstadt Ōsaka in Schloss Eggenberg*. Graz: Universalmuseum Joanneum 2010, p. 156-161
- 2 Kaiser, Barbara; Naschenweng, Hannes P.: “Ein Indianisch spanische Wandt per 25 fl.” Zur Geschichte des *Ōsaka zu byōbu* in Eggenberg. In: Franziska Ehmcke, Barbara Kaiser (ed.): *Ōsaka zu byōbu. Ein Stellschirm mit Ansichten der Burgstadt Ōsaka in Schloss Eggenberg*. Graz: Universalmuseum Joanneum 2010, p.173-177. 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター編『国際シンポジウム報告書 新発見「豊臣期大坂図屏風」』,2008.11.22. 大阪城天守閣編『大阪城・エッゲンベルグ城友好城郭締結記念 特別展 豊臣期大坂図屏風』,2009. 関西大学なにわ・

- 大阪文化遺産学研究センター編『なにわ・大阪文化遺産学叢書 19 新発見 豊臣期大坂図屏風』,2010.
- 3 桑田忠親『桃山時代の女性』吉川弘文館,1996[1972], p.167.
- 4 北川央「大坂冬の陣図屏風、夏の陣図屏風に描かれた大坂城一極楽橋の検討」(和歌山県立博物館編『戦国合戦図屏風の世界』,1997所収), p.13-17
- 5 宮本雅明「大阪城下町の形成」(高橋康夫ほか編『図集日本都市史』東京大学出版会,1997[1993]所収), p.132-133
- 6 森毅「都市のなかの職人・商人 鋳物屋と魚市場」(佐久間貴士編『よみがえる中世2 本願寺から天下へ大坂』平凡社,1989所収), p.144-166
- 7 大渡章『大阪名所むかし案内 絵とき「摂津名所図絵」』創元社,2006, p41
- 8 堺市役所編『堺市史』,1930, p.9, p.882
- 9 秋里籬島「摂津名所図絵」(森修編『日本名所風俗図絵 10 大阪の巻』,角川書店,1980[1796]所収), p.31
- 10 北川央「住吉大社と平野郷」(『平野区誌』,2005所収), p.208. Kuroda, Kazumitsu: *Der Sommer-Festumzug des Sumiyoshi-Shintôheiligtums auf dem Eggenberger Paravent*. In: Franziska Ehmcke, Barbara Kaiser (ed.): *Ôsaka zu byôbu. Ein Stellschirm mit Ansichten der Burgstadt Ôsaka in Schloss Eggenberg*. Graz: Universalmuseum Joanneum 2010, p.132-133.
- 11 林豊『史跡名所探訪 大阪を歩く 大阪市内編』,2007, p.17-18.
- 12 福島克彦「近世前期における西国街道と淀川問屋—大山崎周辺を中心に—」(『山城国大山崎荘の総合的研究(第二次)』(2002年度—2004年度日本私立学校振興・共済事業団「学術研究振興資金」研究成果報告書)所収), p.44)
- 13 曙晴翁「淀川兩岸一覽」(永野仁編『日本名所風俗図絵 11 近畿の巻 1』,角川書店,1981[1863]所収), p.157, p.511
- 14 福島克彦註 12 論文 p.35.
- 15 大山崎町歴史資料館編『天王山 山麓と街の移りかわり』2003, p.6.
- 16 長野敏一編『難波神社御造営記念誌』難波神社御造営奉賛会,1974, p.23-30.
- 17 秋里籬島註 9 論文 p.145. 難波神社「浪華百事談」(『大阪府神社史資料』大阪府,1986[1933]所収)p.158.
- 18 長野敏一編註 16 書 p.26-30.
- 19 櫻井敏雄「住吉大社の建築」(三好和義・岡野弘彦ほか『日本の古社 住吉大社』淡交社,2004所収), p.105.
- 20 秋里籬島註 9 論文 p.51
- 21 西口順子「四天王寺」(『日本美術史事典』平凡社,1987, p.388-389所収) 同寺寺領帳には文禄3年秀吉室北政所(1548-1624)は金堂領として100石を、慶長6年(1601)秀頼は同寺領1000石、また同14年今宮社領として15石を与えたとあります。 島田次郎「四天王寺寺領」(『国史大辞典』第6巻,吉川弘文館,1985所収), p.904
- 22 宮元健次『建築家秀吉 遺構から推理する戦術と建築・都市プラン』人文書院,2007[2000], p.189.
- 23 林寛治『宇治・黄檗・平等院・万福寺』,1993, p.5
- 24 倉沢行洋『増補 対極 桃山の美』淡交社,2000[1983], p.142.
- 25 平凡社地方資料センター編『京都・山城寺院神社大事典』平凡社,1997, p.443-444.「醍醐寺」
- 26 平凡社地方資料センター編『京都・山城寺院神社大事典』平凡社,1997, p.89-90.「岩清水八幡宮」
- 27 福島克彦「第4回企画展「信長・秀吉と大山崎」の展示資料について」『大山崎町歴史資料館 館報』第3号,1996, p.32.
- 28 「住吉名勝図絵」(永野仁編『日本名所風俗図絵 11 近畿の巻 1』角川書店,1981[1794]所収), p.261
- 29 林達也「幽斎を論じて吉野花見の詠歌に至る」『国文学』51-11, 学燈社,2006.10, p.10.
- 30 楠戸義昭『醍醐寺の謎』祥伝社,2003, p.299-313.
- 31 秋里籬島註 9 論文 p.10-11.
- 32 秋里籬島註 9 論文 p.24.
- 33 真弓常忠『住吉信仰 いのちの根源、海の神』朱鷺書房,2005[2003], p.42.
- 34 住吉大社社務所編『住吉大社』大阪, p.37.
- 35 座摩神社編『座摩神社御由緒略記』大阪
- 36 大渡章「大阪名所むかし案内」『絵とき「摂津名所図絵」』創元社,2006, p.41
- 37 北川央「神に祀られた秀吉と家康—豊国社・東照宮—」(佐久間貴士編『よみがえる中世2 本願寺から天下へ 大坂』平凡社,1989所収), p.220-221.
- 38 小林智広ほか編『図解 知っているようで知らない戦国合戦の戦い方』綜合図書,2009, p.22-23.
- 39 山名隆弘「鷹狩」(杉山博ほか編『豊臣秀吉事典』新人物往来社,1990所収), p.343.
- 40 桑田忠親註 3 書 p.114.
- 41 住吉大社社務所編註 34 書 p.29.
- 42 朝倉治彦・柏川修一編『喜多川守貞 守貞謄稿』第4巻,東京堂出版,1990[1838], p.147-148.
- 43 真藤健志郎『見る 知る 楽しむ 家紋の事典』日本実業出版社,2005[1985], p.184.
- 44 村上伸彦「小袖」(石田尚豊ほか編『日本美術史事典』平凡社,1987所収), p.324-325.
- 45 渡辺武「巨大都市を目指した「秀吉の城下町建設」」(『歴史群像 名城シリーズ 大坂城 天下人二人の武略 燦然』学習研究社,2000所収), p.80.
- 46 丹波基二『姓氏・家系・家紋の調べ方』新人物往来社,

2002[2001], p.196-200.

47 丹波基二註 46 書 p.149-150.

48 津田三郎「秀吉の死 豊国大明神となる」(市立長
浜城歴史博物館編『神になった秀吉—秀吉人気の秘密
を探る—』2004 所収), p.38.

49 森田恭二『悲劇のヒーロー 豊臣秀頼』和泉書院,
2005, p.69-73.

50 森田恭二註 49 書 p.57.